

曹洞俳壇

選・村松五灰子

新涼の水存分に野草展

佐賀県 池内 淳子

評 すぐそこに近づく季節の予感。みずみずしさと爽やか感が「水存分」に彷彿。野草展の会場に穏やかさと喜びが溢れる。

蝮消え止まりし時間動き初む

岐阜県 金子 嘉幸

評 恐ろしい蝮が視界から消えた。ややあつて固まっていた周辺の空気や人の心に安堵がひろがり言葉も出はじめたつかの間の景の呼吸が的確に描けた。

◆木道の先へ先へと赤蜻蛉あかとんぼ

北海道 大野 節子

◆結跏趺坐けつかふざもそもそ動く夏休

静岡県 富岡 一郎

◆ど忘れの脳の回路ろうや秋微雨あきこぼり

秋田県 小田篤恭葉

◆逆らはず生きてほろほろ零余子飯むかごめし

東京都 矢野 祥子

◆写経には写経のリズム秋の蝉

愛媛県 井上 征郎

◆いつの間に祖母きて坐る孟蘭盆会

茨城県 鈴木 米征

◆取り仕切る子等いきいきと地藏盆

静岡県 望月かほる

◆ミニトマト孫の来る日に赤いくつ

滋賀県 松岡千鶴子

◆九十の身につきまとふ秋思かな

三重県 山下 利夫

◆初秋やうしろ寂しきわが齢

長野県 下島 博

*選者吟

著ぶくれきて優先席へ座りけり

五灰子

*作句小見

日も短くまた十二月となれば、いよいよ気ぜわしい思いに駆られます。かにかくに一年が過ぎてゆきます。

希望の来年という思いで居ます。皆さまに良い年でありますようにお祈りいたします。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

日焼けせる畑の野菜に銀色の雨を降らせて
狐の嫁入り 鳥取県 山本 浩一

評 「狐の嫁入り」とは陽が照りながら小雨が降ること。真夏のかんかん照りに日焼けした畑の野菜に、束の間のお湿りだろう。「銀色の雨」が狐の毛並を思わせ面白い。

子連れて盆の帰省の上野駅汽車の動けば
訛りはじまる 秋田県 小田 鳶恭葉

評 汽車が動かないうちはまだ東京なのである。がたんと動き出した途端に、心は故郷に向かって飛んでゆき、お国言葉が車内に飛び交う。捉え方が斬新的を射ている。

◆ たうたうと流れ着きたるデモの河一滴のちから国を動か
せ 埼玉県 石濱 徹

◆ 大地震に傾くままの古き家の屋根に豪雨を跳ね返しをり
岩手県 阿部 漣子

◆ 被災地の魚魂供養碑海へ向きぼつねんとあり更地の中に
宮城県 鎌田登喜子

◆ 山間にサイレンの音木霊して一村深き黙禱に入る
東京都 守屋 栄子

◆ 苛立ちは得体の知れぬところより灯りに集く虫の如くに
鳥根県 横山 稟吾

◆ 夕闇に白き鉄線うかびいで亡き母よりの便りが届く
長野県 両角 徳子

◆ 一村は稲刈る音に包まれて糊満載の軽四走る
新潟県 星野 三興

◆ 歌ともと慕いし人や世を去りて寂しき弥生雪はふりつつ
北海道 高橋 哲

◆ 伸びすぎて戸惑ひてゐる朝顔の蔓さき仲間絡めてやり
青森県 岩間 甫

◆ ほんやりと岐阜提灯に浮かびでる根笹の家紋脈みやくと
継ぐ 愛知県 深谷ハネ子

*選者詠

天高く青き魚ら泳ぎおり有象無象をたのし
みながら ちづ

*作歌小見

私のことは私が一番分かっているかと思うとそうでもない
ようです。「苛立ち」という己が感情を、持て余すかのよう
な横山さんの一首にも共感しました。

拙歌は雲間の青空に注目したものです。

※本誌九月号に掲載させていただいた、新潟県星野三興さまの短歌内
「弥彦の峰」は「弥彦の峰」の誤りです。訂正してお詫びいたします。(出版部)



大本山永平寺



安楽の法門

雪囲いに覆われた永平寺は、参拝者の訪れも少なくなり静けさに包まれる日が多くなりました。

十二月の八日は「成道会」です。成道とは、お釈迦さまが菩提樹の下で坐禅に入り八日目の朝、明けの明星をみておさとりを開き、仏に成られたことをいいます。そして、このことを讃える法要が成道会です。

お釈迦さまの成道に因んで、十二月一日から八日の朝まで集中的に坐禅修行の「臘八摂心」を行います。朝起きてから寝るまで、一回四十分の坐禅を一日およそ十四回坐ります。足を組む度に痛みが増し、肉体的にも精神的にも追い詰められながら一週間を過ごします。

道元禅師は、『正法眼蔵』「坐禅儀」に

「坐禅は習禅にはあらず、大安楽の法門なり、不染汚の修証なり。」とお示しです。身も心も追い詰められて「なぜ坐禅が安楽なのか？」と考えてしまいます。

道元禅師は、何かを目的とし習得する為の坐禅ではなく、坐禅は坐禅に徹すること。それがそのまま仏であり安楽であるとお示しなのです。坐禅だけではなく日常生活においても、食事の時は食事。仕事の時は仕事。休息の時には休むことに徹するということなのです。

修行僧たちは、坐禅によって徹する心も培われていくのです。

ご本山だより



大本山總持寺



大遠忌の締めくくりに

十二月は臘月ろうげつともいわれ、修行道場ではとても大切な月です。一日から八日未明まで「臘八摂心ろうはつせしん」が修され、八日にはお釈迦さまが悟られたことを祝う「成道会じやうどうえ」法要が、仏殿に於いて江川禪師さまが大導師となり勤められます。

「摂心」とは、心をおさめて坐禅三昧に徹することです。お釈迦さまの尊いみ跡を慕い、早朝三時より夜九時まで一週間ひたすら僧堂に籠って坐禅に打ち込むのです。清掃や東司とうす（便所）のとき以外は、食事ふきぎんも諷経も全て僧堂で坐禅を組みながらいたします。さて、今年は大遠忌にとりまして五十年に一度の「二祖峨山禪師さま大遠忌」の年でありましたが、無事に大円成することが出来ました。大円成後は普段の修行生活に戻り、例年と変わることなく諸行持に取り組んでいます。

特に、「臘八摂心」は、總持寺開祖・瑩山禪師さまの『瑩山清規ぎ』によって「臘月の長坐」として全国に広まっていった歴史がありますから殊に大切な行持といえます。

現在の總持寺では、臘八摂心のほかに、二月の「涅槃会摂心ねはんえ」、六月の「伝光会摂心」、毎月の「一日摂心」が勤められています。

總持寺では普段の修行生活を営みながら、平成三十六年の開祖・瑩山禪師さま七百回大遠忌に向けて更に歩みを進めます。